

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	教育学専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年 文学研究科教育学専攻 博士課程前期課程2年		氏名 粕谷 圭佑 印		
	所属・職名 文学部教育学科・教授		氏名 北澤 毅 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同	名	
研究課題	生徒間の<関係性>の組織過程に関する相互行為論的研究				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科教育学専攻 博士課程前期課程2年		粕谷 圭佑		
研究期間	2016 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,790円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

生徒はお互いの関係性を相互行為の中でどのように示しあっているのか。本研究はこの問題関心に成員カテゴリー化分析の視点から新たな視点を与えることを試みる。

本年度は教育社会学における生徒文化論、スクールカースト論を踏まえ、従来の社会学の役割論の限界を示し、それに対するエスノメソドロジーの成員カテゴリー化分析の有用性を検討した。さらに映画の場面分析を行ない、生徒の関係性を相互行為論的に分析することの可能性を示した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 教育社会学 } { エスノメソドロジー } { 生徒の関係性 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**問題関心の概要**

教育に関する議論のなかで、「生徒の関係性」のありかたは、しばしば「キャラ化」「同調圧力」「スクールカースト」といった語句とともに、「いじめ」という社会的現象や生徒の「悩み」「苦しみ」といった心的状態を生み出す問題含みなものとして語られてきた。そしてそのような問題含みな「生徒の関係性」は生徒の「文化」やクラスの「構造」によって規定されるものであるとこれまで「理論化」がなされてきた。しかし、こうした「理論」が説明する「生徒の関係性」と、実際に日常生活で行われている生徒の実践の間には、乖離が感じられる。なぜなら、「生徒の関係性」はたしかに問題として立ちあがる場面がある一方で、そのほとんどは平穏でスムーズなものにみえるからである。エスノメソドロジーでは、「理論化」する以前から、「理論化」するしないに関わりなく、人びとの日常はたえまなく進行し、秩序だった形として理解可能なものとしてそこにある、ということに着目する。こうした視角をとったとき、「生徒の関係性」が実際の相互行為において、どのようにして立ち上がるのだろうか。本研究は、こうした問題関心のもと研究を行い、以下の4つの成果をあげた。

(1) 問題の所在の明確化：これまでの<生徒>研究の射程

「生徒」についての先行研究として、教育社会学の生徒文化論と一般書籍も含めたスクールカースト論を検討し、これまでの生徒研究の概観を捉えた。そこで確認されたことは、生徒文化論においてもスクールカースト論においても、生徒を「構造」や「文化」といった枠組みから捉えてきたことであった。さらにこうした従来の生徒研究の特徴として、分析枠組みとしての生徒の「グループ」や「権力」を、研究者が見いだしているということが確認された。そして、本研究の検討課題を、第一に従来の生徒研究の認識枠組みの検証、第二に相互行為における生徒の「グループ」や「権力」の観察可能な検証、として設定し、問題設定の明確化を図った。

(2) 社会学における「役割論」の限界の提示

生徒研究の認識枠組みの検証として、文化学習論とその根底を成している社会学の役割論を検討した。代表的な犯罪の文化学習論であるサザランドの分化的接触論は、犯罪行動は犯罪的行動パターンとの接触によって学習されるものだと説明したが、そこでの学習がどのようなプロセスを経て行われるものであるかをサザランドは明らかにしていなかった。その手がかりをコーエンの議論に求め、犯罪の文化学習論と社会学における役割論との深い連関を見いだした。役割論の検討としては、構造主義的役割論としてマートンの「役割群」概念、役割論の相互行為場面への適用としてゴフマンの「役割距離」概念を検討した。こうした検討をとおして確認されたことは、役割概念は「地位-役割」の規範モデルに基づく説明概念であり、役割論を相互行為場面に適用するには限界があるということであった。

上記(1)(2)の研究作業を通して、本研究は生徒を「構造」や「文化」という枠組みから説明しようとする従来の生徒研究の限界を示した。そして、こうした生徒研究に対しての新たな視点として、カテゴリー論の可能性を検討する方針を見いだした。

(3) 成員カテゴリー化分析 (Membership Categorization Analysis 以下 MCA) の有用性の検討

相互行為における人びとのカテゴリー化についての議論は、サックス(H. Sacks)を始祖としてエスノメソドロジーの領域を発展してきた。本研究では、その理論検討としてサックスのカテゴリー論から MCA と呼ばれるヘスター & エグリンの「行為の中の文化 culture in action」研究まで、その発展と議論を検討した。その中で、サックスのカテゴリー論は、人びとによるカテゴリーの「使用」を「社会的記述」するための道具概念であることが確認された。こうした意味でカテゴリー論は行為や現象を「説明」する理論である「役割」論と異なった視角を採っており、ある事態や現象を研究者が作り上げた説明概念で理論化しようと試みる伝統的 sociology の構築的分析を乗り越えようとするものである。それに対して、エスノメソドロジーの視座においては、それぞれの相互行為が起こっている場で人びとの実践が理解可能であるならば、それがいかにして理解可能なのかを明らかにすることが目指されるのであり、とりわけカテゴリー論は人びとが「カテゴリー」を資源にして行なう相互行為に目を向けているのである。

研究成果の概要 つづき

こうしたカテゴリー論の発展型としてヘスター&エグリンの「行為の中の文化 culture in action」研究がある。彼らは、成員のカテゴリー化はローカルなものとして達成されるものであり、そうしたカテゴリー化の中に、われわれの文化が局所的な形で立ちあがる、という点を強調する。これによって、成員のカテゴリーの使用を脱文脈的に捉えようとするのは、人びとが実際にカテゴリーを使用する際に特徴的になっているインデックス性を無視しかねないことをヘスター&エグリンは主張した。そして人びとのカテゴリー使用がローカルな秩序を産出するものであり、そうした秩序産出の行為の中に文化が立ち上がり形成されるということが確認された。

このようにして本研究は、生徒の関係性にたいしてカテゴリー化実践の観点からアプローチすることの可能性を探求してきた。生徒の関係性は、生徒の「内部」にある「心理」や「特性」によって決まるものでも、生徒の「外部」にある「構造」や「文化」によって決まるものでもない。そうではなく、生徒の関係性は、その都度都度の相互行為のなかに示され、相互行為において新たに立ち上げられ続けられるものである。こうした研究の方向性を見いだしたことが今年度の本研究の最大の成果である。

(4) 生徒の相互行為場面分析による知見

上記(3)の研究成果を通して得た分析視角を用いて、映画『桐島、部活やめるってよ』から、生徒の相互行為が描かれている箇所を分析を試みた。4つの断片の分析を経て得た知見は、生徒の「関係性の安定」、「関係性のゆらぎ」、「グループ」は、相互行為におけるカテゴリー化実践によって観察可能になっている、ということである。検討した分析場面は「あるグループを形成しているように理解できる会話」であるが、会話のトランスクリプト上では「わたしたち」「あのひとたち」というカテゴリーが、局所的な形で立ち上げられていた。さらにそのカテゴリーの要素を変化させることで、その場に居合わせたメンバーの間に関係性を安定させたり緊張させたりすることを可能にしていることが示された。さらに、限られた分析であるが、カテゴリー化実践の「非対称性」が行為者間の「権力」差として観察される可能性も示した。

今年度の本研究が得た知見は、生徒の関係性が問題化することに対して、教師、または生徒自身がそれを制御する可能性があることを示唆している。本研究が試みてきたことは、日常生活を行なうにあたって、われわれが自然に「わかってしまう」生徒の「関係性」が、相互行為の中でどのようにして立ち上がっているのかを記述する作業であった。これは言い換えれば、生徒の「関係性」が立ち上がる「形式構造」を探求する営みである。

「関係性」の形式構造の制御可能性がひらけた時、「生徒の関係性」のあり方は、教育問題や生徒自身の悩みの対象としてだけでなく、生徒がみずからのあり方を選択し表出する際の「一つの方法」となるのではないか。本研究は、そういった形の「生徒指導」や「生徒理解」の可能性を探るひとつの試みとして発展する可能性がある。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

粕谷圭佑, 2017, 「相互行為の分析可能性についての一考察-成員カテゴリー化分析の射程」『立教大学大学院教育学研究収録』第14号, pp. 1-16.

②

該当なし

③

該当なし

④

2016年度 修士論文「相互行為に立ち上がる<生徒>の関係性-成員カテゴリー化実践に着目して」